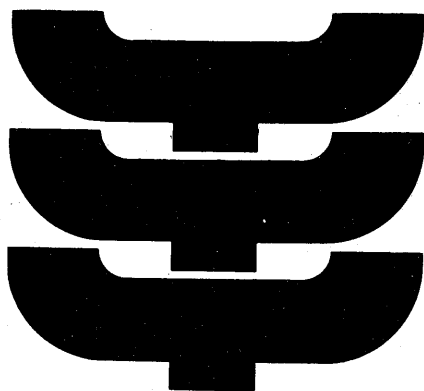


大野町の文化財

〈第 二 集〉

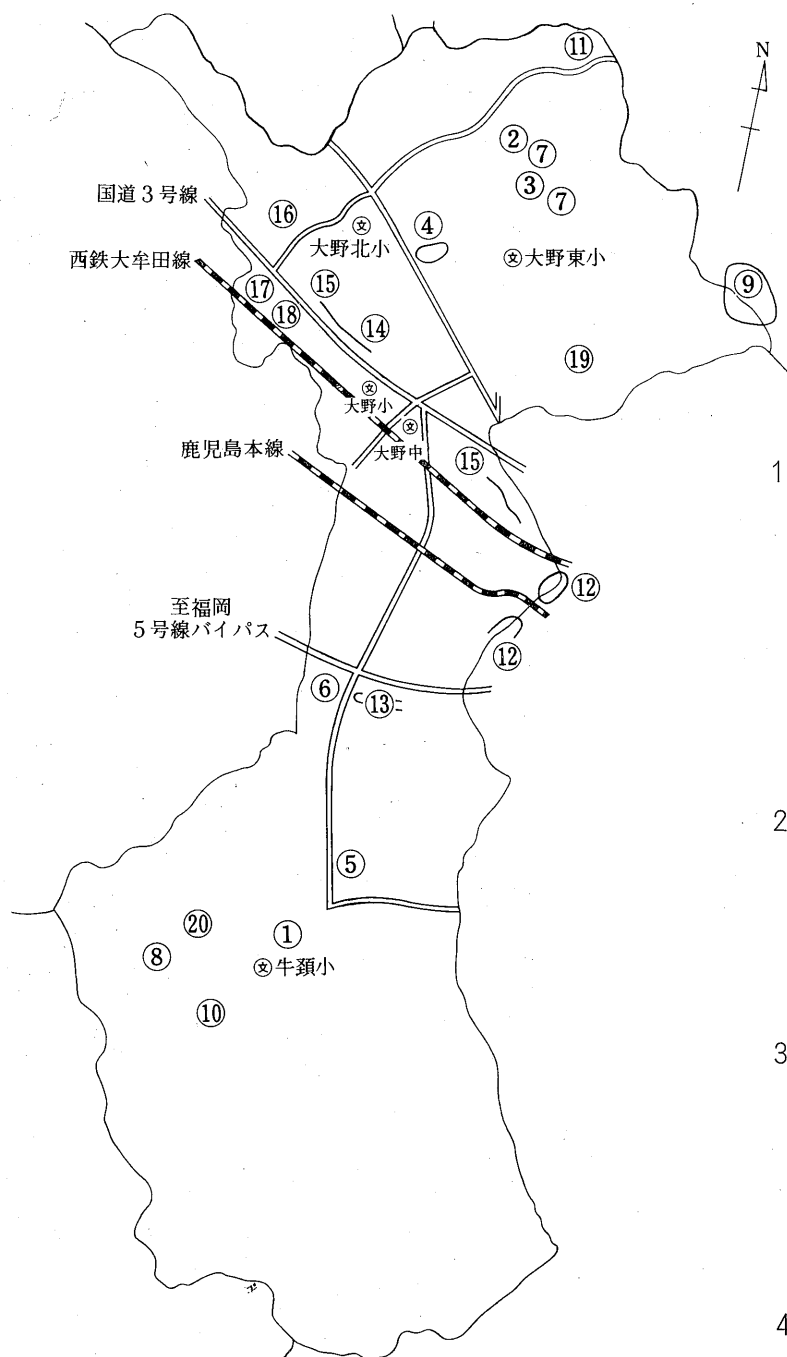


大 野 町 教 育 委 員 会

目 次

1. 大野町文化財所在地	
2. 序	1
3. 埋 蔵 文 化 財	
① 乙 金 古 墳 群	2～5
② 牛 頸 大 谷 窯 跡	6～8
4. 出土した土器類	9～14
5. 民 俗 資 料	
筒 井 の 井 戸	15～18
6. 城 跡	
① 大 野 城 跡	19
② 不 動 城 跡	20
③ 唐 山 城 跡	21
7. あ と が き	22

大野町文化財所在地



1. 埋蔵文化財

- ① 牛頸窯跡
- ② 乙金窯跡
- ③ 乙金王城山古墳
- ④ 中区寺尾遺跡
- ⑤ 上大利大浦窯跡
- ⑥ 上大利野添窯跡
- ⑦ 乙金古墳群
- ⑧ 牛頸大谷窯跡

2. 史 跡

- ⑨ 大野城跡
- ⑩ 不動城跡
- ⑪ 唐山城跡
- ⑫ 水城跡
- ⑬ 小水城跡

3. 民俗資料

- ⑭ 筒井の井戸
- ⑮ 運河跡
- ⑯ 御笠の森
- ⑰ 雑餉隈聖観世音立像
- ⑱ 御笠，那珂郡界標
- ⑲ 釜蓋道標

4. 書 跡

- ⑳ 竹田家書蔵文書

序

大野町は、歴史的立場からみると「文化財の宝庫」であるといわれている。すでに発掘調査された文化財について考えてみてもわかるように、かつて本町は、農業生産はもとより、殊に窯業を中心とした一大工業地を形成していた事が伺い知れ、これら先住の祖先が果たした役割りは、現在もなお他に類をみない高度な文化遺産として、われわれに「何物か……」を語りかけて来るのである。

いま、本町は「都市化」の渦中にあり、町内各所で行なわれている宅地造成や、現在計画されている国土開発事業とも関連して、更に埋蔵文化財の発掘が行なわれる事は必至であるが、私たちはその調査、保護について格段の努力を惜むものではない。

昭和45年は、2件の発掘調査と、ほかに1件の調査が県文化課の協力、指導によって行なわれたが、この「大野町の文化財」（第二集）は、これらの結果をレポートする意味も含めて、町内の史跡埋蔵文化財、民族資料書跡等について、年代や場所、内容等、写真入りで出来るだけわかり易く編集したつもりである。

この発刊を契機として、町内各方面のかた方の「文化財」に対する関心が高まり、その保護活用について理解あるご協力をいただければ幸せである。

昭和46年3月

大野町教育委員会

教育長 阿部哲郎

埋蔵文化財

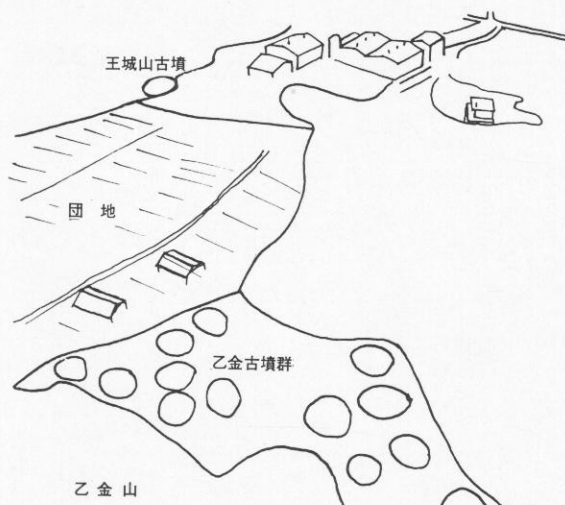
◆ 乙金古墳群



(乙金古墳群航空写真)

略図

福博トラクターミナル



乙 金 古 墳 群

今から約1,400年前、全国各地に多数の古墳が築造され、家族の墓所となっていた。これら古墳は多く丘陵緩斜面を利用して造られているが、当時の村落社会構造を反映して群在している。つまり1つの古墳が1家族を、5～10基の古墳よりなるグループは特に密接な家族関係、いわゆる同族関係を、さらにこれらグループを包括した群が1村落をそれぞれ構成していたものと考えられる。

御笠川以東丘陵のうち、釜蓋・井ノ口部落内にあった古墳は宅地造成等の土木工事ですでに消滅し現在では乙金でのみ古墳群の様相が把握される。

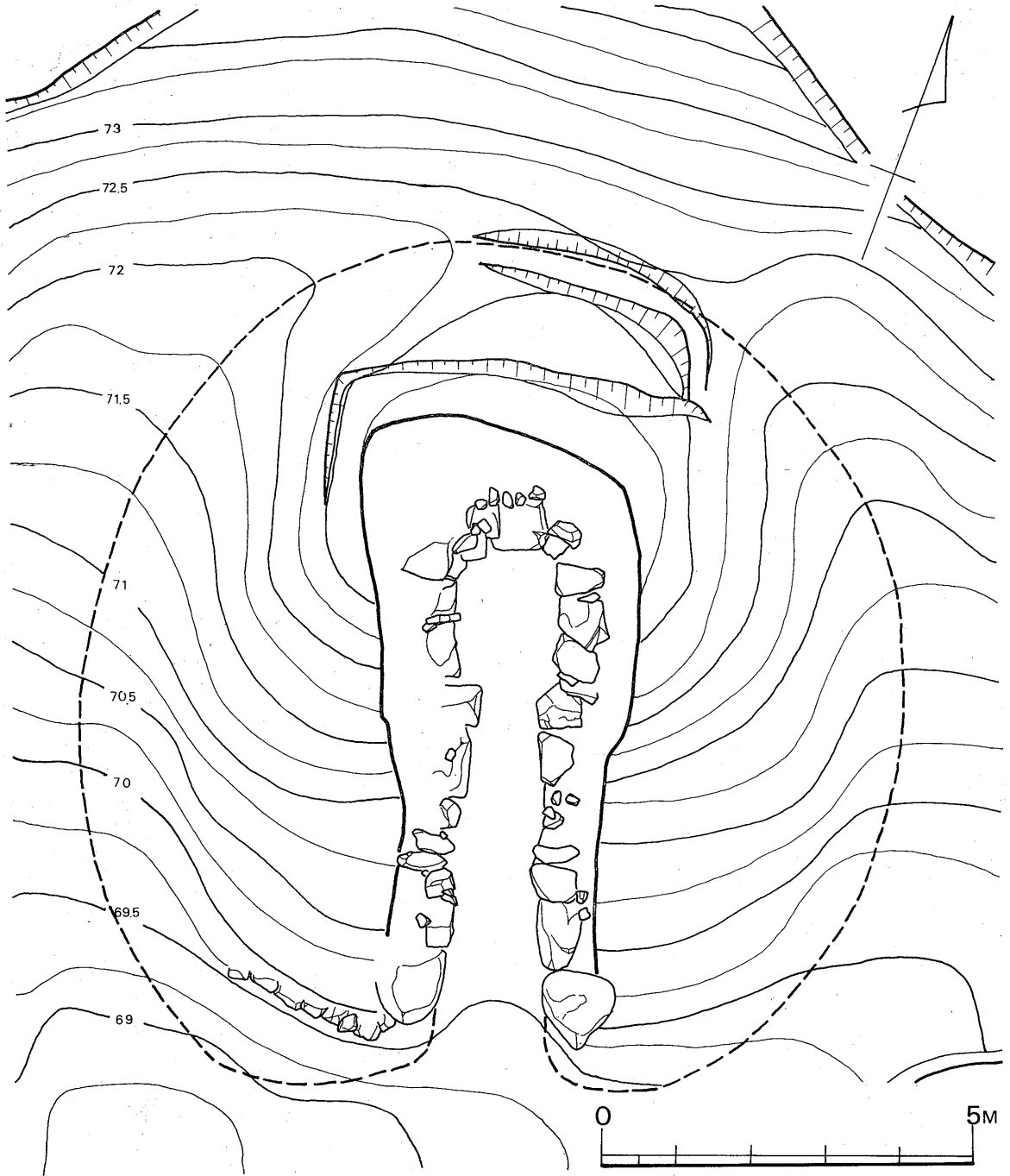
乙金山西麓にはこれまで確認されただけでも46基の古墳が群在しており、地形の状態を考慮して5つのグループに分けられる。昭和44年に王城山グループ（現在福博トラックK・K敷地内）の5基が調査され、昭和45年にはさらに3グループの古墳が調査された。そのうちの1つ（地番876）は6基の古墳によって構成されている。

調査は古墳構築順序の丁度逆に、医学の解剖実験のごとく、1枚1枚皮を剥ぐように行なった。以下1つの古墳の調査について概略を述べる。

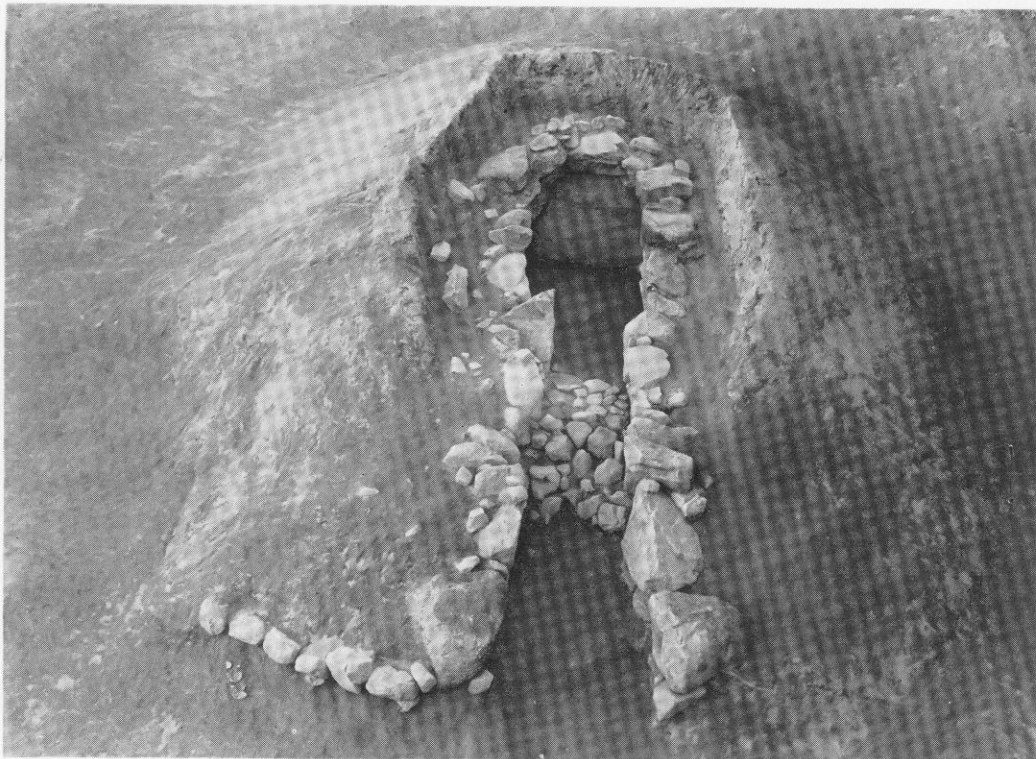
次頁図のごとく石室の天井石はすでに取り去られており、内部も盗掘を受けていた。仕事はまず石室内部の清掃から始まった。奥の部屋（玄室）は182cm×220cmの長方形で、奥壁1枚、側壁各2枚ずつの石を立てて構築されている。入口（羨門）には平石を敷きつめているところから、本来玄室にも敷石を施していたとも考えられる。入口通路（羨道部）は非常に長く、470cm前後で、中間に入口を密封する石が積まれていた。写真中左側の石列はさらに墳丘の裾にそって伸びてゐる。

次いで墳丘本来の状態を露出させるため、現在の表土を剥ぎ取った。その結果直径約10mの円墳であると判明した。その後墳丘盛土と石積みとの構築上の関係について明らかにするため、盛土をあたかもデコレーションケーキを切るように $\frac{1}{4}$ ずつ切り取った。その結果、現在の土木技術と大差ない方法で築かれていると判明した。当時の土木技術の伝統が、太宰府・水城・大野城・寺院を建立する際に用いられ、さらに中世・近世と引き継がれてきたのであろう。

古墳全景実測図



古墳全景実測図



古 墳 全 景 （表土をはぎ取った状態）



古 墳 全 景 （盛土を半分切り取った状態）

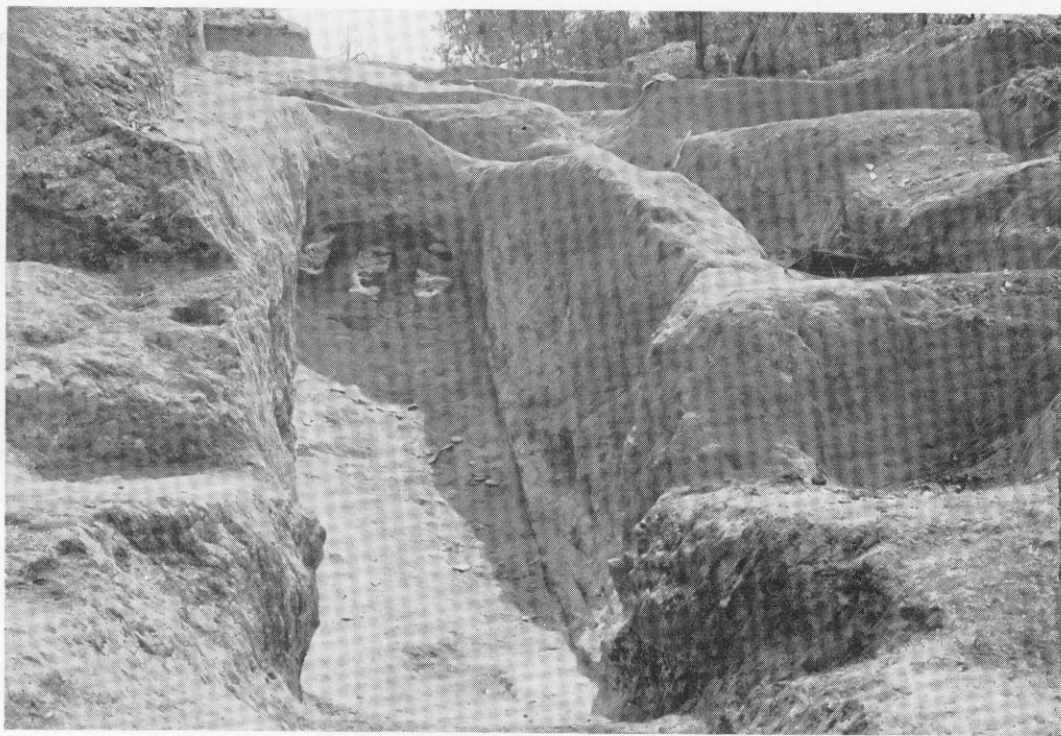
牛頸区大谷古窯跡

大谷古窯跡については古くから知られていたが、このたび西鉄の造成事業にともない、国土館大学考古学研究室が、大野町教育委員会の協力を得て発掘調査を実施した。

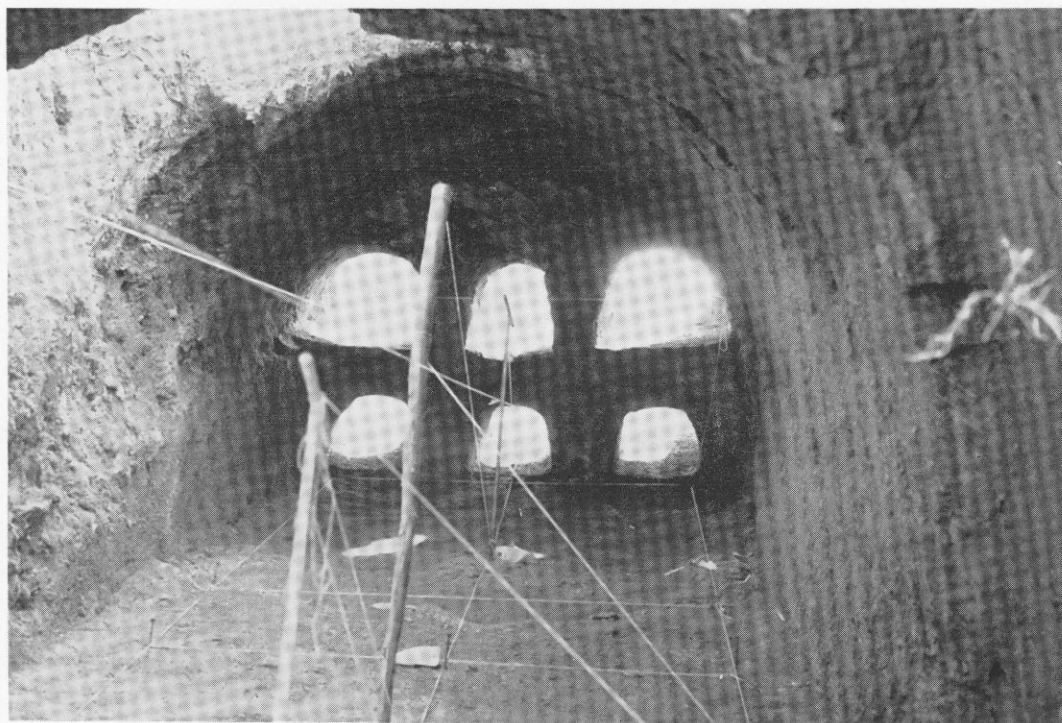
調査の結果、窯跡は全部で6基確認され、うち4基について調査を行った。これら4基の窯跡はいずれも須恵器を焼いたものであり、このうち3基はほぼ完全な形で残っている。3基のうち2基は煙り出しが3本、あとの1基は煙り出しが6本あり、特にこの煙り出しが6本ある窯は、この当時の窯構造としては全国的にきわめて例のないものである。これらの窯跡の年代は、およそ6世紀後半から7世紀後半、あるいは8世紀初頭頃と考えられる。

煙り出しが3本あるものは、昭和43年国土館大学が発掘調査した、大浦窯跡がやはり3本の煙道をもっており、時代的にもほぼ同時代と考えられ窯構造も良く類似していること、また、距離的にもきわめて近い点などから、これらの窯場で須恵器を焼いていた工人達は同一工人であったのかも知れない。また、これらの3本の煙道のある窯跡からは、^{めがわら}女瓦、^{おがわら}男瓦、^{のしがわら}熨斗瓦などが若干出土しているが、この資料は非常に貴重なものである。九州に^{かわらぶき}瓦葺の建造物が造られはじめたのは、およそ7世紀後半頃と考えられているが、これらの瓦は他の出土した土器などの年代から7世紀前半頃と考えられるので、これらの土器の年代推定が正しければ、九州でもすでに7世紀初頭頃には^{ぞうが}造瓦がおこなわれていたことになるのである。

また煙り出しの6本ある窯は7世紀後半から8世紀初頭と考えられ、窯構造としては煙り出しが6本あるだけでなく、^{たきぐち}焚口の側面が右で組まれていることなど全国であまりその例を聞かないものである。また7世紀後半から8世紀といえはすでに太宰府も存在しており、太宰府との需給関係を考える上できわめて重要な意味をもつものと考えられる。

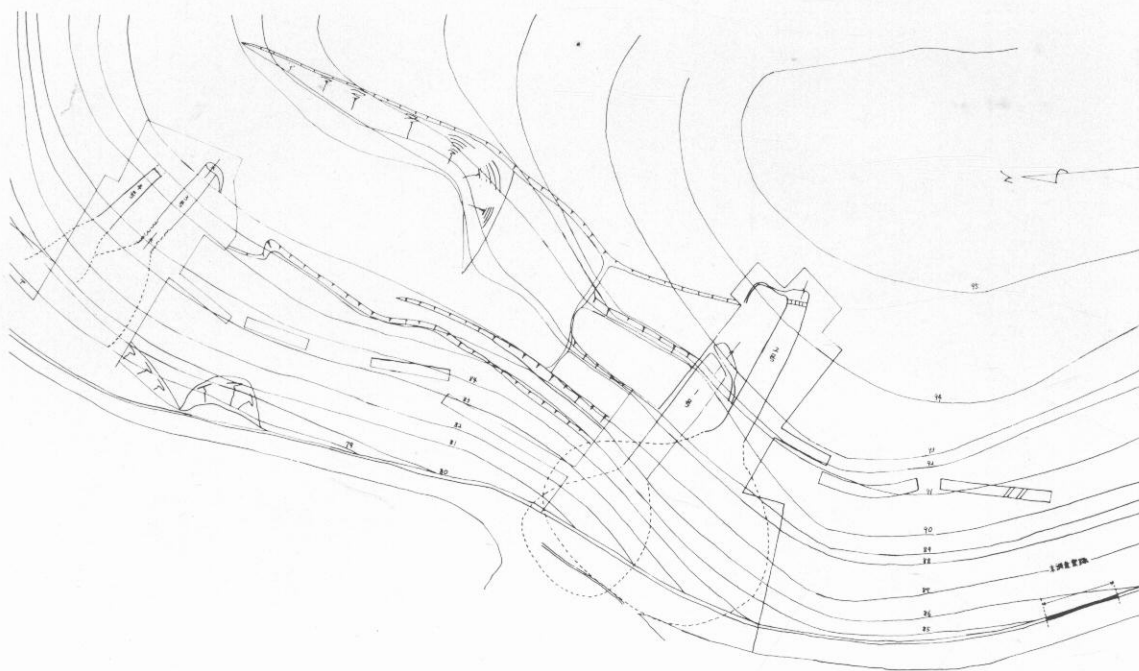


(3本の煙道をもつ窯跡)



(6本の煙道をもつ窯跡)

●実 測 図



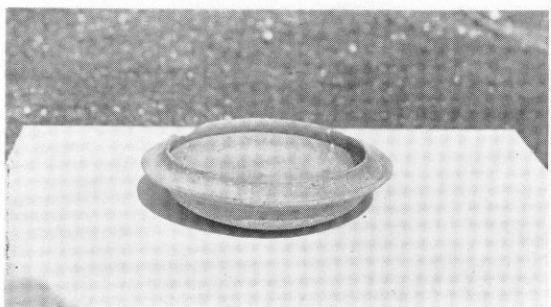
牛頭大谷古窯跡から出土した須恵器



杯



罎 (はそう)



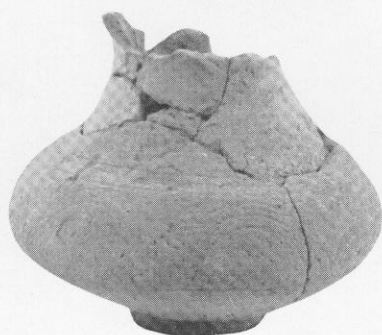
杯



平 瓶

出土した土器類

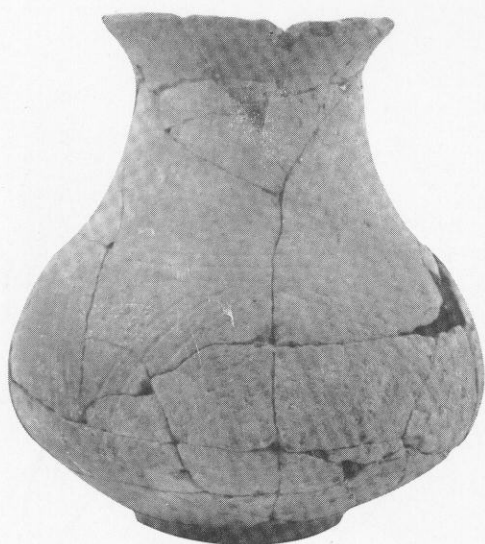
◆ 中区寺尾遺跡



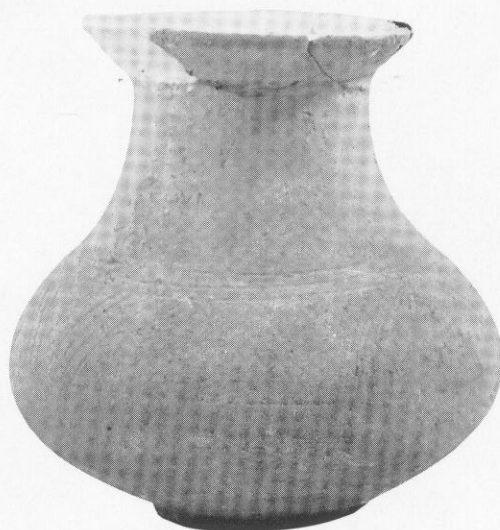
土 壺 墓 副 葬 壺（壺形土器）
弥生時代前期（紀元前2～1世紀）



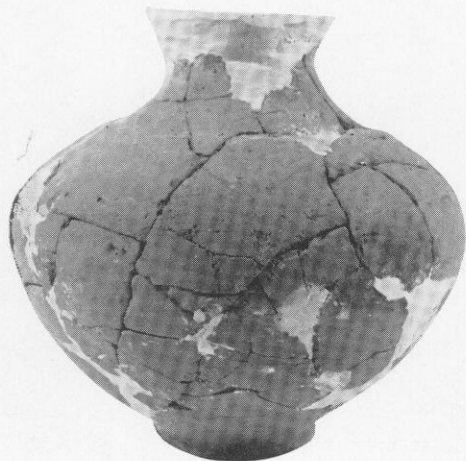
土 壺 墓 副 葬 壺（壺形土器）
弥生時代前期（紀元前2～1世紀）



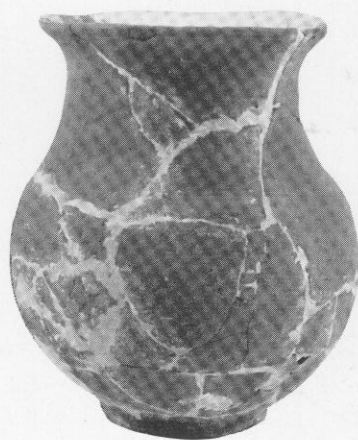
土 壺 墓 副 葬 壺（壺形土器）
弥生時代前期（紀元前2～1世紀）



土 壺 墓 副 葬 壺（壺形土器）
弥生時代前期（紀元前2～1世紀）



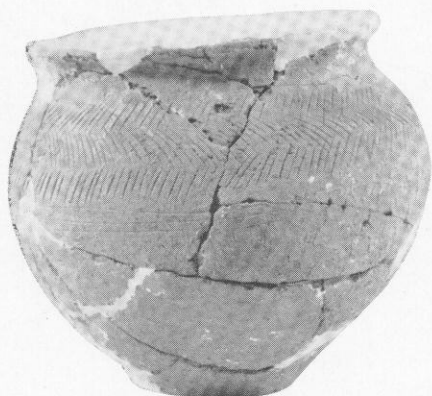
土墳墓副葬壺（壺形土器）
弥生時代前期（紀元前2～1世紀）



土墳墓副葬壺（壺形土器）
弥生時代前期（紀元前2～1世紀）



甕棺副葬壺（壺形土器）
弥生時代前期（紀元前2～1世紀）

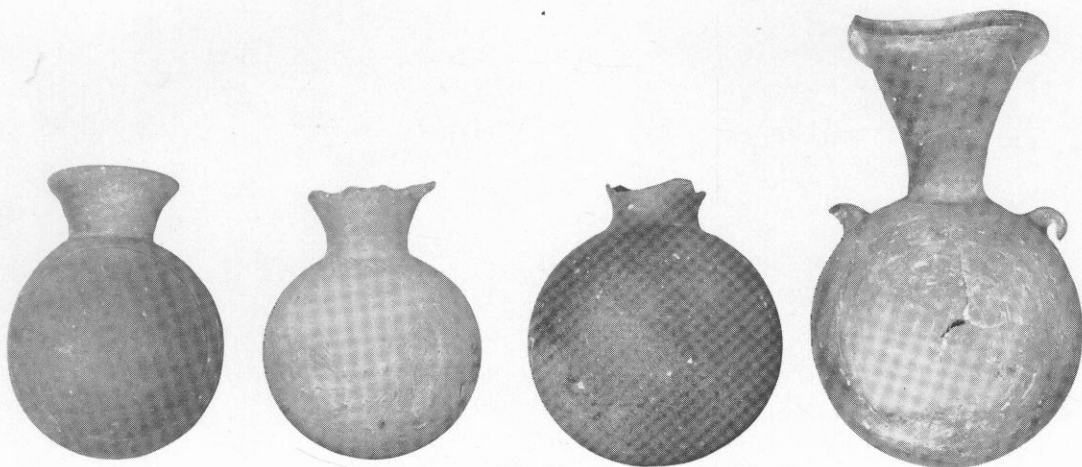


土墳墓副葬壺（広口壺形土器）
弥生時代前期（紀元前2～1世紀）



甕棺副葬壺（無頸壺形土器）
弥生時代前期（紀元前2～1世紀）

◆ 乙金王城山古墳



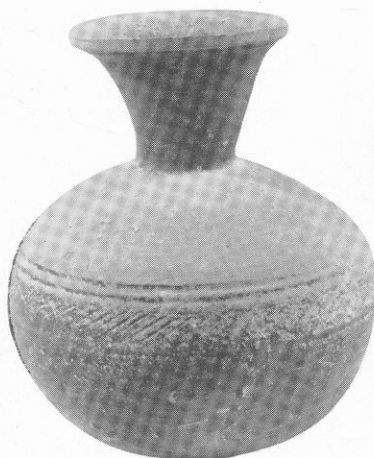
須 恵 器 (提瓶)

古墳時代後期 (6 世紀末)



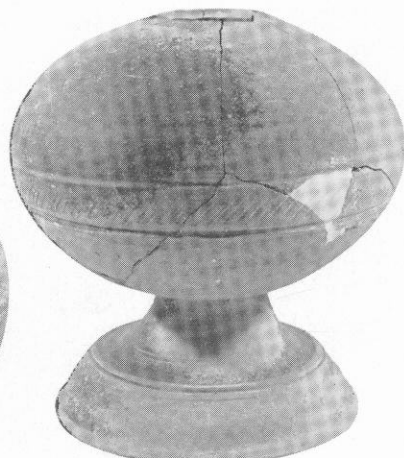
須 恵 器 高 杯

古墳時代後期 (6 世紀末)



須恵器高杯 (長頸壺)

古墳時代後期 (6 世紀末)



脚 付 長 頸 壺 (口縁欠)

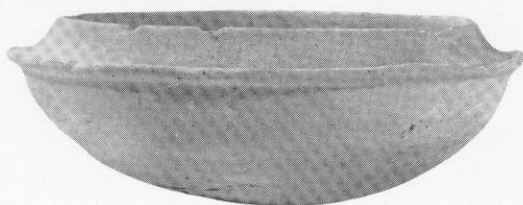
古墳時代後期 (6 世紀末)



須惠器 壺
古墳時代後期（6世紀末）



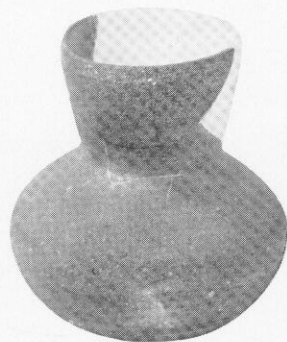
須惠器 壺
古墳時代後期（6世紀末）



須惠器 杯
古墳時代後期（6世紀末）



勾 玉、馬具類、鉄 鏃



須惠器 壺
古墳時代後期（6世紀末）



直 刀
古墳時代後期（6世紀末）

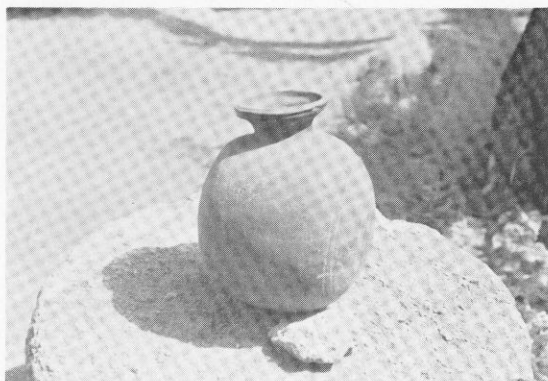
◆ その他の出土土器類



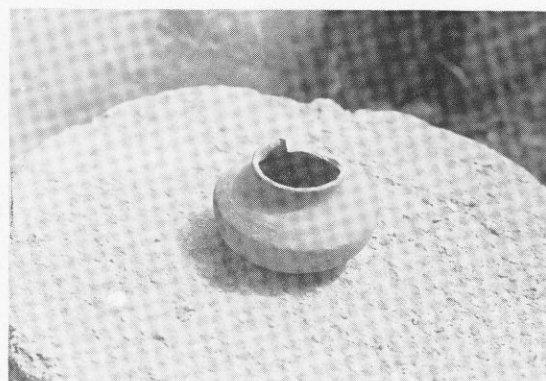
出土地 牛頸城ノ山 名称 須恵器 蓋付杯
時代 古墳時代後期（6世紀末）
山上高太郎氏蔵



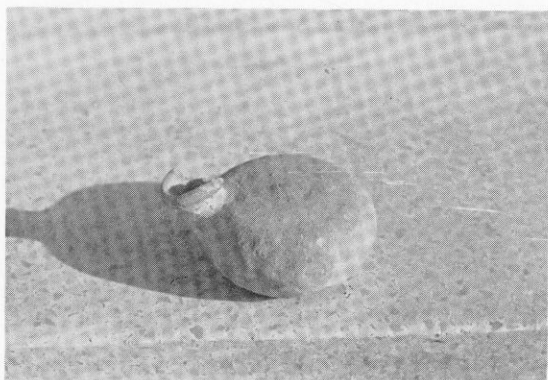
出土地 牛頸堂ノ本はなぐり 名称 須恵器 壺
時代 古墳時代後期（6世紀末）
山上高太郎氏蔵



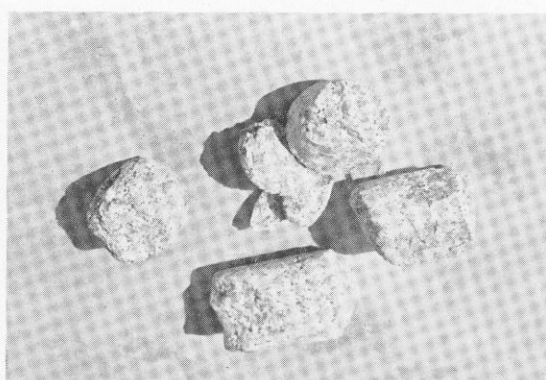
出土地 牛頸日の浦 名称 須恵器 提瓶
時代 古墳時代時期（6世紀末）
山上高太郎氏蔵



出土地 牛頸尾崎 名称 須恵器 壺
時代 古墳時代後期（6世紀末）
山上高太郎氏蔵



出土地 牛頸大谷 名称 須恵器 平瓶
時代 古墳時代後期（6世紀末）
田中 好美 氏蔵



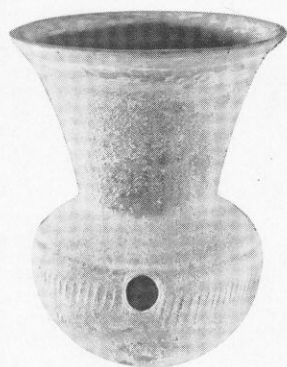
出土地 牛頸東浦 名称 窯だたき
時代 古墳時代後期（6世紀末）
川辺 清 氏蔵



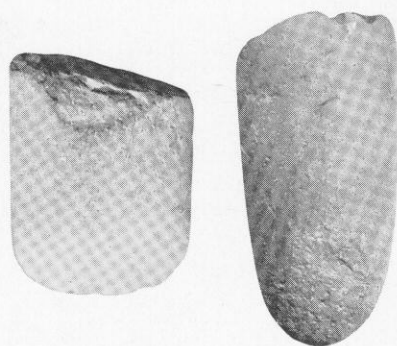
出土地 乙金 名称 板付式 壺
時 代 弥生時代前期 (紀元前2～1世紀)



出土地 乙金 名称 板付式 壺
時 代 弥生時代前期 (紀元前2～1世紀)



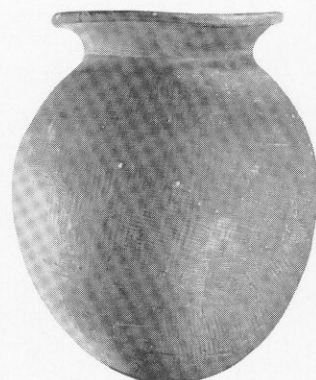
出土地 下大利 名称 罎 (はそう)
時 代



出土地 牛頸 名称 石斧 (せきふ)
時 代 弥生時代



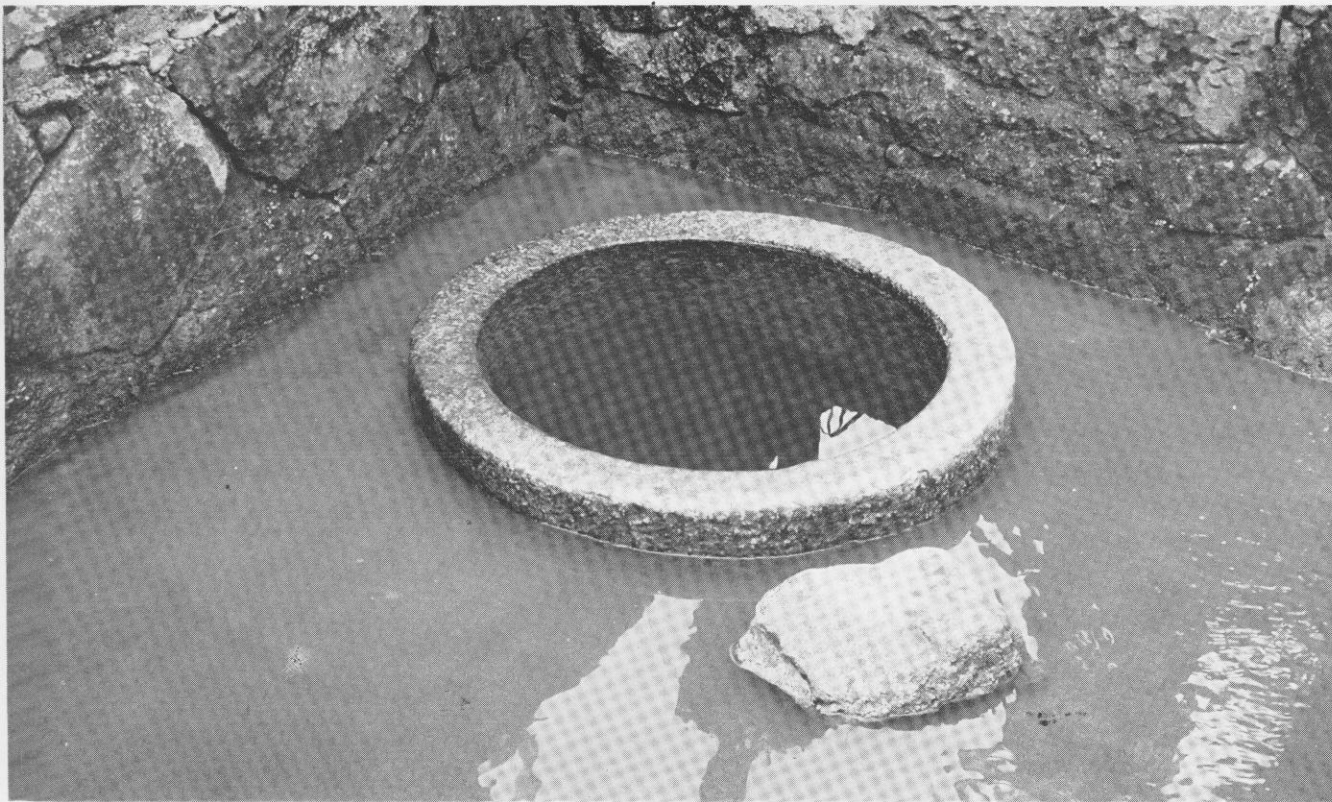
出土地 乙金 名称 甗 (こしき)
時 代 古墳時代



出土地 上大利 名称 壺
時 代 古墳時代

民俗資料

◆ 筒井の井戸



筒井村（大野町牛頸竹田家所蔵文書「筑前国続風土記」より）

雑餉隈より南に近き村なり。村中に筒井とて清水あり。木の筒をもって井^{げた}韓とす。此故に村の名をも筒井というなり。

其水極て清冽にして、大旱といえども涸せず。常に筒の上に湧上る。只冬至の夜のみ水いはずという。

筒 井

筒井は、大野町大字上筒井 520 番地であって、発掘調査前の状況は、花崗岩製の井戸枠が 2 段につまれ、周囲には、30cm×40cmほどの大きさの敷石がなされていた。調査は、11月17日から行なったがこの敷石は、井戸枠にかけられた排水孔の高さまでであったことから後世のものと判断し、これを取り除くことからはじめた。又、同時に井戸枠の記念銘があるかどうか、などをたしかめたのち、実測、写真撮影などを行なって、11月19日に終了した。調査の結果は、敷石の下から、木製の洗い場と考えられるものが出土し、現在の敷石より古い敷石があることも確認した。しかし、井戸枠には、実見出来た範囲では、銘文は、みつかってはいない。

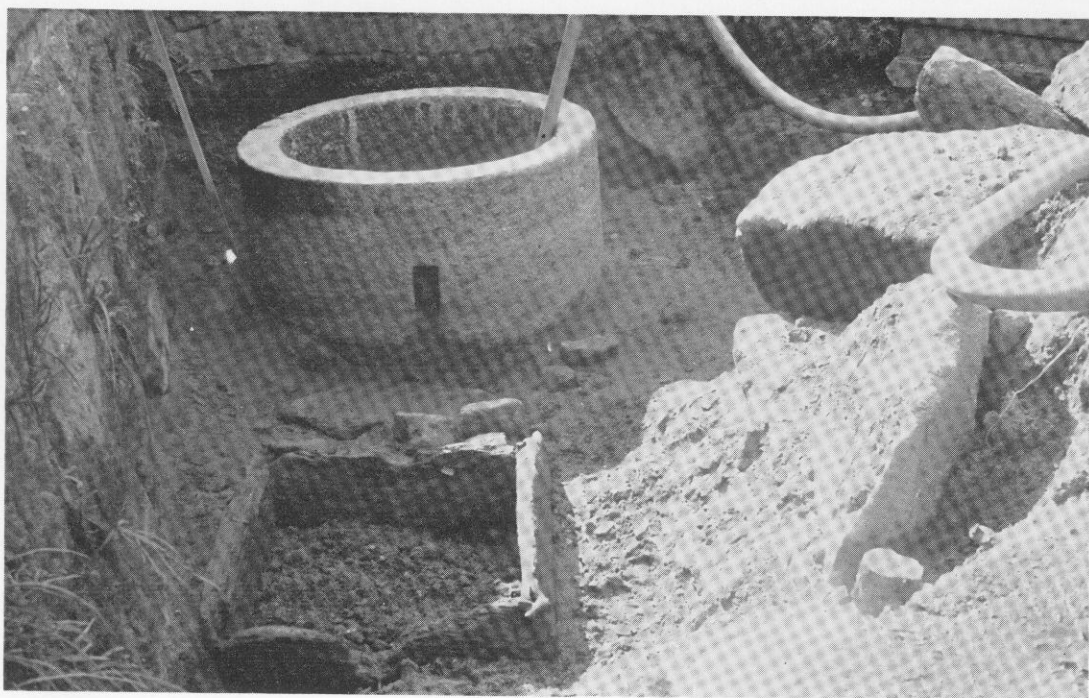
井戸枠は花崗岩をくりぬいた円形の井戸枠で、2段に積まれている。直径 115 cm、縁幅 13 cm で、上段の枠の深さは 76 cm、下段の枠の深さは 84 cm である。上段の井戸枠には、縁より 26 cm 下ったところに縦 20 cm 横 10 cm の湧水のための排水孔が、穿たれている。排水口は、内側が高く、外側に流れ出すように又、下辺は U 字形に穿たれている。井戸枠の敷設にあたっては、地盤が砂地であるため、掘り形を作らず、井戸枠を置いて、中の土をかき出して枠をすだいに下にさげて行く工法—潜底法—をとっているようである。地盤が砂地のためか、潜底法によるためか、井戸枠は、北東の方向に 3 度ほど傾いている。

洗い場、井戸枠の排水孔の穿たれた方向に、約 70 cm 程離れて、1 辺約 60 cm、高さ 28 cm ほどの方形の木枠がある。枠の組み方は、東西の側板内側に溝をつけて、南北の側板を落し込む組方（小穴）をしている。この木枠の北側と南側の板には、上部に柄の跡かと思われるあたりがあり、さらに高かったものかも知れない。調査時には、このあたりは、排水孔から樋で、湧水を誘導したものかとも考えたが、北側の板にもあたりがあるのはおかしく、このあたりは、柄のあとと考えるべきものと思われる。

出土遺物、洗い場の周辺および中から、白磁、青磁、瓦、染付の陶器片などが出土した。青磁は、小破片であったが白磁は、口縁部の外縁に断面三角形の粘土帯が付くもので、宗代華南地方で作られたもので、日本では、平安時代末から鎌倉時代初期に考えられているものである。又、瓦は、今日のいわゆる棧瓦ではなく、丸瓦と平瓦を組み合わせる本瓦葺の軒丸巴文の瓦が、瓦当のみ出土している。染付の陶器片は、いずれも、小さな破片ばかりであった。この外、井戸枠の周囲から、完形に近い陶器片が出ているが、いずれも近世のものと考えられる。

以上、筒井の調査結果の概略を記した。井戸枠の記念銘を見ることが出来なかったのは残念であるが、下段の井戸枠外側にある可能性も考えられる。

洗い場については、染付、軒丸巴文の瓦の出土などから、江戸時代頃のものの一応想定出来る。周囲には、すでに家が林立し、公共の広場であったであろう昔日の井戸の姿は、もはやもとのめることは出来ないが、傍には薬師如来をまつる祠もあり、昔の共同井戸として、又、「筒井」の名のおこりを示す記念物として長く後世に伝えたいもののひとつである。



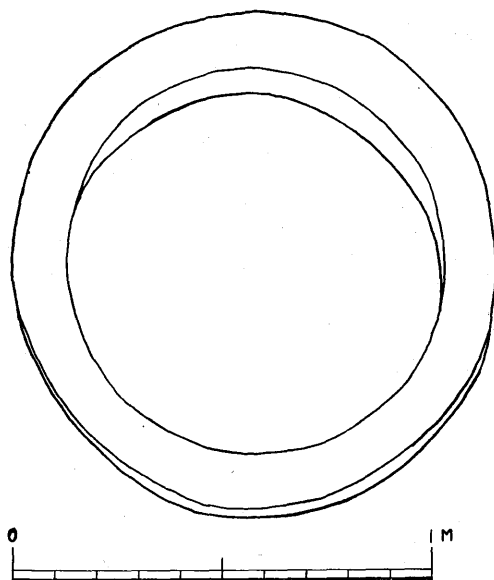
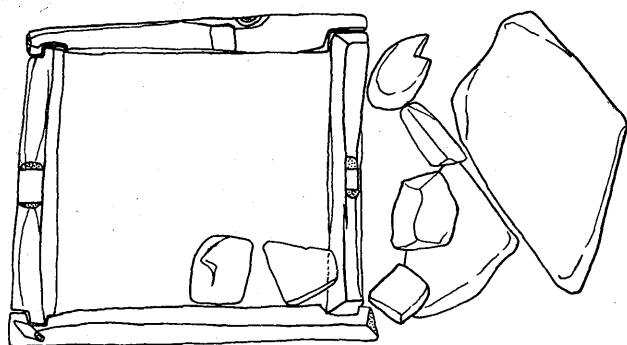
排水口より



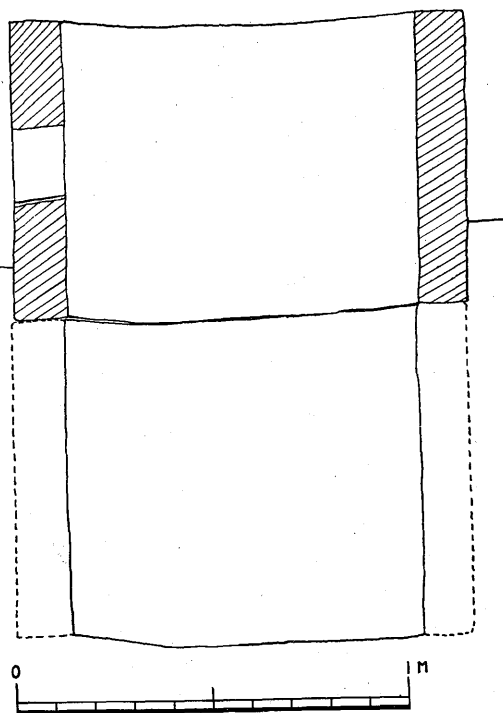
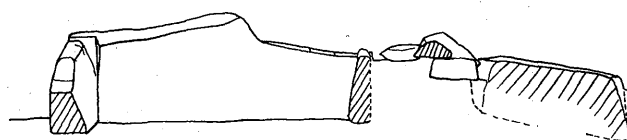
上面より

実測図

断面図



側面図



城 跡

◆ 大野城、岩屋城

欽明天皇23年（西暦562年）唐と新羅の連合軍により、任那の日本府は攻め亡ぼされ、更に天智天皇2年（西暦663年）には白村江で日本水軍が大敗し、4世紀以来300年にわたる我が国の朝鮮半島干涉は終りをつげたが、こんどはその来襲に備えるため、天智天皇3年には、対島壱岐、筑紫等に防人と烽を置き、又水域の大堤を築き翌4年秋8月百濟人達率憶礼福留、達率四比福夫に命じて、大野及び縁の二城を築かせ、また対島には金田城、長門には長門城、讃岐には屋島城、河内には高安城を



築いて国防線を固めたのである。中でもこの大野城は、太宰府防備のために築かせた古代朝鮮の山城の様式によるもので、土塁、石塁で全山を廻らし、谷々には水門を設け、極めて堅固な当時における最も進歩的な築城方法であり、日本の築城史上最初のものである。東西1,500m、南北1,600m、周囲5,200mあり、非常の時には附近の住民も収容する設備があり、平時には糧食や兵器を貯え、兵士の営所も設けられていた。このため山の名も大野山、又は大城山と呼んでいた。

山頂の西の尾根を火ノ尾崎といい、烽火を設けていた所であり、西北の鼓峰は軍団を設置して兵士の訓練を行っていた所であり、主城司は主城官の居たところという。

光仁天皇宝龜5年（西暦774年）3月、外寇（特に新羅の来寇）をはらうため、山頂に円満山四王院が創設され、四天王を祠ったため今では四王寺山とよばれ、鼓峰には毘沙門天の遺跡が残っており、附近からは経塚や経筒が多く発見されている。四王寺の蔵のあった焼米ヶ原には現在でも礎石が残っており、土中から米の焼けたのが出てくる。

元亀天正の戦国乱世の時代になり、高橋三河守鎮種がここに城を築き岩屋城と称したが、その養嗣子入道紹運は天正14年（西暦1586年）島津氏の北上をはばみ、僅か600余名の手兵をもって数万の島津連合軍に囲まれ、悪戦苦闘14日間、遂に全将卒1兵残らず、刀折れ矢尽きるまで死闘し、城を枕に討死した古戦場である。

この山のよび名は、大野山、大野城鼓峰、四王寺山、御笠山等あるが、皆同じ山である。

（万葉集五卷） 神龜5年7月21日 山上憶良

大野山きりたちわたる我かなけく おきその風にきりたちわたる

（万葉集八卷） 思筑紫大城山歌一首 大伴坂上郎女

いまもかも大城の山にほととぎす なきとよむらむ我なけれとも

（万葉集十卷） 詠黄葉歌 柿本朝臣人麿

いちしろくしぐれの雨は降らなくに 大城の山はいろづきにけり

（現存集 敦頼所著）

大野山ふもとの原にきりこめて おきその風に月ぞさやけき

（桧垣 姫集） 四王寺山を題にて

老ぬれど年はかくして有ぬべし しわうじ山は人にみゆれば

ふらばふれ 御笠の山の近ければ 葦島まではさしてゆきなん

（高橋紹運辞世の句）

流れても末の世遠く埋もれぬ 名をや岩屋の苔の下水

屍を岩屋の苔に埋めても 雲井の上に名をとどむべき

◆ 不 動 城



不動城跡 (大野町牛頸竹田家所蔵文書) 「筑前国統風土記」より

牛頸村にあり。秋月氏の旗本奈良原刑部少輔という者、此城を築て在城せり。その後裔奈良原兵庫亮といいし者、秀吉公九州征伐の時、秋月種實が先手として討死せり。



◆ 唐 山 城



唐山古城（大野町牛頸竹田家所蔵文書「筑前国続風土記」より）

乙金村にあり。山上に古城の跡二所あり。東城は安河内備前という者の居城なり。西城は神武修理亮居城なり。兩人ともに大友に属せり。神武は宇美の神職なりと言伝う。

此城は立花城の遠見城なりという。

…… あ と が き ……

牛頸大谷窯跡の発掘調査が意外と延び、この報告書をま
って編集にかかりましたので 発刊が予定より遅れまし
たが、どうにか第 2 集をお届けすることが出来ました。

ご高覧いただき、何かとご助言くださいますれば幸甚に
存じます。

(S. I)

※表紙カットは、文化財愛護のシンボルマーク

昭和 46 年 3 月 発 行

大 野 町 教 育 委 員 会
